

【にんげん部門(中学生)・文化時報社賞】

「いつもの道」なんて言わせない

札幌大谷中学校 3年 米本 安珠

私の通学路は、毎日同じ。家から駅まで自転車、そこから電車、次に地下鉄、そして歩いて学校へ向かう。朝はまだ眠く、電車の中ではスマホを見て過ごし、周りの景色はほとんど見ていなかった。そんな毎日が続いていた。

ある日の朝、公園の隣の歩道に土が掘り返されていた。多分、前日に草刈りがあったからだと思う。その時は特に何も気にしていなかったが、なんと、一週間後にそこから小さな芽が出ているのを見つけたのだ。まだとても小さくて、何という植物なのかは分からなかつたが、太陽に向かって生えていて生き生きとしていた。毎日通っている場所で新しい命が生まれるなんて、不思議だったし少し嬉しい気持ちにもなった。

その日以来、私は通学路で周りを見るようになった。自転車で走っていると、道路の脇に咲いている草花が、季節によって変わっているのに気づいた。電車の中では、窓の外のビルや家並みが流れしていくのを見るようになった。特に地下鉄の車内では、普段は気にしていなかった壁の広告や、車内放送の声に耳をかたむけるようになった。どれも今まで意識していなかったものだ。

一度、私が使っている駅が工事中のため、普段通らないルートを通った。すると、いつもの改札口周辺の喧騒とは異なり、人がまばらで、なんだか落ち着いた雰囲気だった。私は、すっかりこの新しいルートの虜になってしまったのだ。

私はこれまで、毎日をただ過ごしていただけだったのかもしれない。成績や友達のことばかり考えていて、自分の周りの小さな変化や面白いことを見逃していた。でも、あの朝に小さな芽を見つけてから毎日が変わった。

自転車と電車と地下鉄。私の通学路は、よく見ると新しい発見がつまっている。私はそれを大切にしたい。日常生活に潜む面白さを見つけるのが樂しみだ。